慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 海南小記(柳田國男著, 大岡山書店發行) |
| Sub Title | |
| Author | 宮良, 當壯(Miyanaga, Masamori) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1925 |
| Jtitle | 史学 Vol.4, No.3 (1925. 8) ,p.148(460)- 149(461) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250800-0148 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

從事せしめつつ質實剛健の精神を練磨せしめたるものであつて、薩摩の郷士、相馬、毛利各藩の郷士、仙臺藩の地頭等これに屬する。後者は農民の精良なるものを兵に徴して訓練したるもので、水戸藩の農兵や江川太郎左衞門麾下の農兵等はこれに屬する。救濟郷士は土佐の山内氏が舊長曾部氏の遺臣たる浪士を取り立てゝ郷士となしたるが如く、藩の財政逼迫して藩士に充分なる給與をなし能はざるため、家計困難に陷りたる藩士を救濟せんがために新田の開墾に從事せしめたるをいふのである。山内氏以外に羽前米澤の上杉氏肥後の細川氏肥前の鍋島氏等に就きてこの種の事實を知る。舊族郷士は阿波の祖谷、肥後の五家、越後の三面、信濃の伊那衆、美濃の多良衆、大和の十津川郷士等であつて、彼等は主家の滅亡後、山間の僻地に部落を發いて土著したものである。登用郷士は百姓を登用して士班に列せしめたる者である。著者は前三種の郷士に就きては夫々例を擧げて詳細なる説明を與へてゐる。

次に郷士の生活と村落社會と題して郷士が自ら耕作する土地の收穫によつて生活するに反し、家中士が俸祿によつて生活したことを擧げ、武元立平の勸農策を引用して郷士の土地經營法の一端を説明し且つ、郷士は藩主から比較的優遇されたため彼等は自ら村落社會に於て一大勢力を振ひ下級民に對して威を逞しくしたる事實を明にしてゐる。郷士設置の目的はその種類により自ら異れども、彼等は概ね武士たる本分を喪失して來たので郷士制度の社會的效果は却つて何等見るべきものがなかつた樣である。明治維新以後郷士は舊城下士と同樣に士族に入籍することとなり、舊城下士が境遇の變轉によつて流離轉變の生活を營むに至りたるに反し、舊郷士は農村に在つて舊來の家產を擁して泰然と餘裕ある生活をつゞけることが出來た。

著者は最後に我が郷士制度と英國の Yeomany とを比較し、その興亡盛衰が彼我共に類似してゐることを説いてゐる。

これを要するに我が郷士制度は軍事上、政治上、經濟上の諸事情より生れたるものであつて、我國農村社會史上の重要問題たることは疑を容れぬ。著者小野武夫氏は農政學者として既に斯界に定評ある人、今や氏によりて本問題の研究に先鞭をつけられた理であつて、本書は假令郷士制度の研究として完璧とは云へない迄も、進んでこの問題を研究せんとする士に親切なる指針として推奬するに足るべきものと思ふ。（恒松安夫）

## 海南小記（柳田國男著　大岡山書店發行）

二もとのクバ（蒲葵）の間から、小波めぐる白濱の小島が、夢のやうに美しく浮出して、三つ四つ見える。歌に名高き鳩間島の眺望を描いたものであらう。「海南小記」は斯くの如き見事な表裝を以て世にあらはれた。本書二十九章、別に短篇四題、附言二項、すべて四百頁に近い。尙これに口繪一葉、寫眞二十五葉、地圖九葉を挿んで、大いに讀者の便宜を計つてある。

此書は著者が大正九年末から十年始にかけて旅行せられた時の收穫である。併しながら單なる旅行記ではない。南島の言語、宗

教、風俗習慣、史實、傳說、社會、人類、考古、其他あらゆる方面に關聯した研究の集大成である。該博なる知識と鋭敏なる觀察とを表はすに、詩の如く麗はしき文章を以て綴られたのであるから、何人も讀了せざれば卷を覆ふことを惜むであらう。

全篇に亙つて語源的說明が可なり多く散見するが、其二三を擧げて見るならば、津久見島、櫛間院、大隅、大泊のヨク、波照間、蒲葵、カライモ、猪、豚等に關するもので、言語學者の傾聽すべきものが澤山ある。氣の毒な話としては水不自由な保土の島の御大師樣水、「南の島の清水」、「海行かば」の漂流談、「三太郎坂」等がある。いれずみの南北、今何時ですか、豆腐の話、久高の屁、赤蜂鬼虎、二色人、南波照間、阿遲麻佐の島等は吾々の最も愛讀して措かなかつたものである。移川教授は東京朝日新聞に於て「柳田氏にとつては其琉球に對する深い造詣の中のただ一片のひらめきに過ぎないのであらうけれども、吾々が讀めば色々の面白い鄕土的觀察記錄に充ちてゐて、氏の研究の深さの程がうかゞはれるのである。とりわけ其行文の例によつて流麗なる、其描寫の詩の如く繪の如き美しさ、南島の情趣の懷しさを坐ろによび起さずにはおかせない。與那國の女、南の島の清水の如き、寧ろ哀切なる文學と呼びたい程だ。」といはれてゐる。まことに著者の島人に對する同情は非常なるものである。

吾々が八重山土俗展覽會を國學院大學で開いた大正九年の秋頃迄は、琉球研究はまだ微々として振はなかつた。翌十年正月柳田先生が歸京せられると、國學院大學鄕土會を初めとして、本塾、三越流行會、其他多くの新聞雜誌等に精細なる發表があり、一方南島談話會及び爐邊叢書に於て、舌と筆に據り、益々琉球研究の必要を唱道せられた。其結果折口、田邊、ネフスキー、三上、佐藤等の諸氏の熱心なる研究家が現はれた。僅か數年の間に琉球研究が斯くの如く盛大になつたことは一に柳田先生のお蔭といはればならぬ。

琉球研究は單に琉球研究を以て目的とするものでなく、わが日本文化の源流に溯つて、上代人の生活の跡を窺ひ知るにあるのである。それは琉球が我が古代社會の面影を最もよく髣髴せしめ、あだかも其研究資料を無限に寶藏する文庫の如き觀を呈するからである。此意味に於て「海南小記」は實に學界に對する一大プレゼントであると云はなければならぬ。（宮良當壯）

## 土佐風俗と傳說

（寺石正路編　鄕土研究社發行）

爐邊叢書の一册にして、土佐の風俗と傳說とのうち土俗學上興味のある主なるものを種々の記錄と古老の物語りし口碑とからとれるものであつて、風俗には年中行事、婚姻葬式、農家風俗、神佛祭事、異風奇俗についてのべてゐるが、特に興味を感ずるのは大古に行はれた歌垣に類する風習が今なほ殘存してゐることである。しかしかゝる風習もまた他の多くの風習と同じやうにやがては文明といふ波濤ののむところとなつて滅びゆくであらう。傳說においては天狗、怪火、猿猴（河童）、幽靈、猫怪、古狸、蛇神、怪